Kwansei Gakuin University

ジョージ・ワシントン・ケイブルの旧さと新しさ

——小説から政治論文へ——

杉　山　直　人

黒人問題について同じように時代を先取りした主張を繰り広げても、ふるめかしい約束事を守りながら小説世界に踏みとどまる限りはケイブルは南部の人気者たりえた。だが、文学の世界を越えて「政治」に足を踏み入れたとき、彼は南部から放逐されざるを得なかった——これが本論の趣旨である。再建期を経てジム・クロー体制が確立しつつあった南部では、小説のオブラートに包み込まずに人種問題について語ることが、ずいぶん危険な行為だったことをケイブルを例に挙げて考えたい。小説と社会・政治論文という二つの異なるジャンルから彼の代表作にスポットをあてよう。

強かった出版社 —— あるいは『グランディシムー族』の保守性

1879年11月から翌年秋にかけて『スクリブナーズ・マンスリー』に掲載された『グランディシムー族』は最終回と同時に単行本として出版された。浩瀚な資料を要領よくまとめあげたアーリン・ターナの伝記『ジョージ・ワシントン・ケイブル』によれば世評はよかったという。W・D・ハウエルズ、シドニー・ラニアといった当代の文人ばかりか、『スクリブナーズ』、『アトランチック』、『アプルトンズ・ジャーナル』といった全国規模の文芸雑誌もアメリカ文学に新しい素材を提供したと好意的だった。南部文学といえばプランテーションものばかりだった読者にすれば、異国情緒たっぷりのクレオール社会のありさまがアピールしたのである。(第7章) 人種

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

問題が扱われていることも評論家たちは気づいていたが、出版当初はこのデリケートな南部の社会問題はあまり目立たなかったようである。

おおたかの肯定的な反応のなかで、さすがにクレオールからは強い反発があったという。1880年暮れ頃クレオール詩人が匿名で出版したパンフレットは「ラジカルな変革と一般の啓発を狂信的使命」と心得るケイブルは（南部の）「美しきものや尊崇されてきたもの」をあざけることで、北部から利益を得たと中傷を交えながら謗った。クレオールからのこうした不快感と怒りが、いくつかの政治論文を発表したのちは、今度は一般の南部人からもケイブルに投げかけられることになるのは皮肉なことである。

閑話休題。出版当初『グランディシム一族』が人気を博したことについて気をつけておかねばならないのは、相対的に脆弱な立場にあった作家と、作家に対して圧倒的に優位だった出版社や雑誌編集者との力関係である。現代作家と違って当時は、作家の社会的地位が十分には確立されていなかった。生殺与奪は出版社が握っていたのである。『赤毛布外遊記』で一躍アイドルとなっていたトウェインならいざ知らず、どちらかといえば地味なケイブルのような作家は出版社さがしに悪戦苦闘するしかなかった。『グランディシム一族』出版より5年前、それまで雑誌で好評を博した短編を集めて単行本にしようとした彼は500人分の購買者リストを携えて「ハーパー」や「スクリブナー」といった大手出版社と交渉する。だが見事失敗。これだけでも両者の力関係が理解できる。

作家は編集者の意向を尊重せざるを得なかった。そこで当時の雑誌編集者が掲載可否を決する際のヤードスティックはなんだったかを考えないといけない。それを示すエピソードがアーリン・ターナの自伝に紹介されている。1875年にケイブルは短編 “Posson Jone” をいくつかの雑誌に売り込もうとして失敗。そのとき『ハーパーズ』の編集長 H・M・オルデン (Alden) はこの短編を拒否した理由として「人間性の不快な面が際だっており、読者の心に不快な印象を与える」とケイブル宛の手紙で説明している。同時にオルデンは『ハーパーズ』に採用されるかどうかは、物語が「楽しい性格」を持っているかどうか、そしてもう一つ「原則的に恋愛小説

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

でないといけない」とも明言した。二つをつなぎ合わせると、楽しい恋愛小説がいちばん良いということになる。ケイブルのこの短編が『ハーパーズ』ばかりか、『スクリブナー』や『ギャラクシ』それに『タイムズ』といった当時の有名雑誌にこぞって拒否されたことを考えると、先の二つの掲載条件は『ハーパーズ』だけに限ったことではなかったであろうことが推察される。（ターナ、第5章）

南北戦争終結後アメリカでは新規に発行される雑誌が飛躍的に増える。1865年には700しかなかったのが、1885年には約5倍の3300になったという。（『ディクショナリ・オブ・リテラリ・バイオグラフィ』第79巻）『ハーパーズ』や『アトランチック』といった南北戦争以前からの雑誌に加え、いま名前のでた『スクリブナー』や『ギャラクシ』、それに『リピンコッツ』や『パットナム』といった文芸雑誌も新規発行の雑誌に含まれた。注意しておくべきは、工業化都市化の進展とともに勃興しつつあった中産階級を主たるターゲットにしたこれら雑誌が、有望な読者として想定したのは家庭の主婦や特に結婚前の若い女性だったことである。ビジネスに忙しく家庭で小説を読むような暮らしをおくることが難しい男性ではなかったということである。

ハウエルズと「厄介な伝統」

『グランディシム一族』が当時の若い女性向きにどのように「楽しい恋愛小説」に物語に仕上がっているかを考えてみよう。だがそのまえに、この小説が19世紀アメリカ小説を長らく支配してきたロマン主義的要素をも律儀に受け継いだ作品であることに注意しておきたい。南北戦争後におこってくるリアリズムの立場からするロマン主義批判と言えばトウェインがただちに思い浮かぶ。南部文化が「サー・ウォルター・スコット病」にかかっているとか、フェニモア・クーパーが114の文学的違反を犯しているといった指摘である。だがここではW・D・ハウエルズに登場してもらおう。『グランディシム一族』が発表された当時、彼はすでに十年近く『アトランチック・マンスリー』の編集長を勤め、アメリカ文壇に大きな影響力を持つようになっていたし、それになによりケイブルをも高く評価して世に送りだす

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

のに功労があったのだから。

> 私が小説を書きだしたころ、われわれにはロマンチックな迷信があってヒーロは何かしたのちでないとヒロインを勝ち取ることはできなかった――勇ましい太っ腹な行動をする必要があった――燃えさかる建物や崩壊してゆく橋といったような危険から彼女を救い出すか、少なくとも危険な長患いをしたときはヒロインに看病してもらわねばならなかった。この厄介な伝統を守った私は自分のヒーロにはどう猛なブルドッグからヒロインを救出させた、もっとも批評家のなかにはこれでは沽券にかかわるではないか、と考えた人もいたのを覚えているが。だが私にすれば命にかかわる危険といわれても他に手頃な物がなく、実際にブルドッグはまこと危険な動物なのである。これは私の処女小説に出てくる…・
>
> (『ノートン・アンソロジー・オブ・アメリカン・リテラチャー』第二版所収、「小説執筆と小説味読――ひとつの非個人的説明」より)

愉快な話である。ヒーロたる者にヒロインを獲得させるためには勇敢で太っ腹なことをさせねばならないと考えたハウエルズが、1872 年の処女小説で書き込んだのが主人公にブルドッグからヒロインを助けださせることだったとは。「人生のほほえましい側面」をこそアメリカの小説家は描き出すべきだと、少なくとも一時期は考えたアメリカン・リアリズムの大御所面目躍如。抱腹絶倒。だがそれはさておき、ここにはハウエルズのような（自然主義の立場から見ればいざ知らず）当時の革新的文芸思潮の持ち主までもが一目置かざるをえなかった恋愛をめぐる「迷信」にも似たロマン主義の「厄介な伝統」の中身が簡潔に要約されている――つまり、ヒーロとヒロインのあいだには生死に関わる重大かつ劇的なエピソードが繰り広げられねばならないという「迷信」である。

考えてみると『グランディシム一族』は忠実にこの「迷信」を守っていることになる。つまり、オーロラへの償いのため白人オノレはフォス・リヴィエール農園を売却するが、この農園は 19 世紀初頭ルイジアナ激動の時代にあって、グランディシム一族にとって例外的に大きな収益をあげてくれる不可欠の物件である。一族の存亡をかけた虎の子である。こうした農園の重要性を承知のうえで売却したオノレは、オーロラのために一族が犠牲になるかもしれない、また自らも一族の裏切り者になるかもしれないというぎりぎりの選択を下したことになる。一族の団結を重んずるクレオール社会にあって、オノレにすればこれ以上の自己犠牲はなかっただろう。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ヒロインを獲得するためにヒーロたる者がなんらかの犠牲を払うという約束事は、他にも形を変えて『グランディシム一族』に生きている。たとえば女性にたいするブラ・クペの態度である。彼はまるで中世の騎士物語のごとく女性には紳士的である。あたりいったいの農園に恐ろしいブードゥーの呪いをかけ続けて白人農園主に大打撃を与え、自らの死と引き換えに白人への復讐を果たし終えることもできたはずである。だが死の直前、赤ん坊をまえにした彼は涙を流して呪いを取り払う。酔っぱらってケダモノのごとく暴れまわりるが、ドン・ホセの妻のまえに出ると腰巻き一枚のこの大男は地面にひれ伏す――ディズニー映画の美女と野獣さながら。女性にはブードゥーの呪いをかけなかったので、死んだのちも若いクレオール女性のあいだでは同情と憐れみをもって語られる。復讐に代わってキリスト教的自己犠牲をもって報いたブラ・クペは、得体の知れないブードゥーの魔法使いから一気に西欧的キリスト教の匂いを濃厚に漂わせる殉教者となっている。

『グランディシム一族』がハウエルズのいう「厄介な伝統」を守っているのは、犠牲を払ったのちでなければ、ヒーロはヒロインを得られないということだけではない。長い病の床にあってヒロインの介護を受けねばならないという、ハウエルズの二番目の指摘も『グランディシム一族』はきちんと満たしている。もちろんフラウエンフェルドとクロチルドである。ニューオーリンズに到着早々フラウエンフェルド一家は全員が熱病にかかり、彼以外は死に絶える。このとき熱病にうなされたフラウエンフェルドが夢に見たと思った若い女性が、実はクロチルドだった。もっとも、この種明かしは物語終結直前の第60章になってからでないと読者には提供されない。最終章でのオノレとオーロラの抱擁シーンと並べて、物語を二組のカップル誕生でめでたく締めくくったケイブルは、まことに女性読者へのサービス精神が旺盛というべき。

4 組のカップル

そこで小説のなかで描かれる4組の男女の愛がどのような組み合わせになっていて、どのような結末を迎えるか確認してみよう。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

・(白) オノレとオーロラ (グランディシムとド・グラピオン、相思相愛で結婚)
・(白) フラウエンフェルドとクロチルド (ヤンキーとクレオール、相思相愛で結婚)

――

・(混) オノレと (混) パルミール (オノレの片思い、絶望した彼の入水)
・(黒) ブラ・クペと (混) パルミール (ブラ・クペの片思いと死)

白人には幸せな将来が約束され、混血の人びとには悲しい運命が待ち受けている。オノレとオーロラの結婚によってグランディシム一族とド・グラピオン一族の宿怨は解消される。そればかりではない。クレオールの二つの名門は一致協力して新しい時代を生きていくことが示される――グランディシム一族所有にかかる最良の不動産売却代金は大半が結局グランディシム一族の手元に残ることになるだろうから。オノレの才覚とオーロラの勇気に加えて、強固な金銭的裏づけまでもがグランディシム一族に与えられたところで物語は終わっている。ルイジアナの統治権がフランスから合衆国に移行するという政治の激変期を、いまや少数派となったクレオールの名家としてグランディシム一族はしたたかに生き延びていくことが示唆される。

フラウエンフェルドとクロチルドはどうか。ここでも万事メデタシ。クレオールの名門の娘と新参者たるヤンキーが家庭を持つ――旧南部の伝統を部分的にせよ担っていたクレオールと北部の進歩思想の持ち主とが仲よく暮らすという構図である。図式的とまで見える南部と北部の融合。いまやフラウエンフェルドの妻となったクロチルドは、母がオノレから引き継いだ農園売却資金の一部を夫である薬剤師の商売に投資している。ということは、ひとつの家庭のなかに南北の相互協力と依存関係が見られるということである。

19 世紀初頭のルイジアナを描きながらも、『グランディシム一族』がケイブルの実際に生きた 19 世紀後半の深南部を描き込んでいるのは、この小説を読むさいの常識である。だから、フラウエンフェルドとクロチルドというカップルの成立と南北戦争後の南部再建とが、そこはかとなく重なり合うように仕組まれていたとしても不思議はない。北部との関係改善と修復をテコに南部の工業化を押し進め、北部に劣らぬ豊かな新南部建設を声高に訴えたヘンリー・グレイディが大喜びしそうな

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

構図が、あまい恋のオブラートとエキゾチックなクレオール文化の香りに包まれて読者に提供される――そのグレイディがのちに南部における黒人の地位をめぐってケイブルと論争することになるのだが。

ともあれメデタシ、メデタシで終わった二組の白人カップルを見る限り、『グランディシム一族』という小説は、それが発表された当時の雑誌の約束事や南部の支配的価値観を遵守しているのがわかる。読者は安心してこの物語を読んでいられた。

今度は混血カップル。若い女性中心の読者を安心させるという点では、混血カップルの運命も白人カップルと変わらないだろう。ただしここでは、混血のカップルが白人カップルとは反対に、幸せにはならないという点で読者を安心させたはずである。これら二組の恋の顛末を支配しているのは基本的に勧善懲悪だからである。ここでいう「勧善懲悪」とは社会の掟に背いた者には幸せは訪れない、といった程度の意味である。クレオール社会の基盤たる道徳観や価値観に反逆逸脱した人物は、その社会の秩序のなかでは生き続けることができないという保守的な罰則主義である。

混血オノレとパルミールはともにアグリコラの死を招いた責任を負う。混血であるがために彼らが受けた屈辱は棚上げしよう。すると結果だけで二人を判断すれば、一人は殺人未遂の罪を犯しており、もう一人はまごうかたなき殺人者である。パルミールはブードゥーの呪いを使ってアグリコラを呪い続け、あげくの果ては彼を刺殺しようとして失敗した。またアグリコラへのそうした彼女の憎悪と殺意を実行に移して成就させたのはオノレだったから。クレオール社会における彼の同情すべき立場を考慮しなければ、帽子をとらなかったのをとがめられた拍子にナイフで相手を刺殺するというのは過剰防衛というしかない。そうした二人をめぐる結末が、もしもハッピーエンドで終わったら、と仮定しよう。フランス逃亡に成功した彼らは、二人を知る人もないかの地で結ばれて幸せに暮らしましたというのでは、当時の読者のなかには釈然としない者も多かったであろう。「勧善懲悪」の結末をオノレやパルミールに準備することで、ケイブルは時代の文化風土を反映した一般受けしやすい道徳的姿勢を守っていた。

作家のこうした保守的な創作姿勢に影を落としているのは、この時代を支配して

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

いたビクトリア朝文化である。この頃発表された代表的イギリス小説では、例えばいちど性的な過ちを犯した女性は最後には堕落していくことが当然のこととして描かれていたという。社会規範からの逸脱を安易に許さない姿勢こそが当時の文化風土だった。こうした例に見られる文芸界の保守性はもちろんアメリカでも変わりなかった。

象徴的な例としては、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてアメリカの国家的課題となってゆく婦人参政権問題にたいする有力文芸雑誌の姿勢がある。主たる読者層を女性ととらえていたにもかかわらず、『アトランチック』など少数をのぞくと、多くの雑誌は婦人参政権に反対していたという。また女性側も異議を唱えなかった。女たるものは政治よりも家庭に関心をもち、夫や子供の面倒を見るのが第一であるというビクトリア朝的な価値観が雑誌を支配していた。

当時、婦人参政権問題と並ぶ社会問題といえば労働争議があげられる。ケイブルが活躍していた時期、アメリカ北部は工業化が進み都市では工場労働者として働くヨーロッパからの移民が急増した。19 世紀最後の 20 年間で 900 万人以上の流入があったという。南欧や東欧から本格的移民がはじまると、都市労働者の劣悪な生活環境や暴力事件、売春、政府の堕落といった社会問題が頻発し、のちの自然主義文学の勃興を促す。だが、アメリカの輝かしい世紀である 20 世紀を迎えるまえに避けて通れなかった 19 世紀末のこうした諸問題にたいして、『ハーパーズ・ウィークリ』のような例外はさておき、多くの文芸雑誌は口をつぐんでいた。この時期アメリカ作家たちの執筆活動を取り巻く文芸風土は社会問題を正面から扱うことを避けていたのである。注意しておかねばならない。(『ディクショナリ・オブ・リテラリ・バイオグラフィ』第 79 巻)

ハウエルズと「作家の責任」

19 世紀アメリカ小説を長らく支配したロマン主義に反旗を掲げて「リアリズム」を主張したハウエルズも、読者に対する作家の役割については保守的な教養主義をかかげる。読者に対する作家の責任ついて 1891 年に上梓された例の『批評と小説』

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

(“Criticism and Fiction”) のなかでヨーロッパ流の姦通小説が、なぜアメリカでは少ないのかを論じたハウエルズはこんなことを言う。

> 〔若い女性のまえで、おおっぴらには話せないような〕人生のある局面を作家が扱うつもりなら、彼ら〔過去と比べて道義的になったアメリカの読者〕は自分たちが尊敬する作家からは彼が疑問の余地なく真摯であることを示す証拠を求める。読者はいっしゅ厳正な礼儀を求める。楽しめるからというだけでは、作家はもはや読者に受け入れられない。どこか外科医か牧師の役割にも似た、より高度な役割を作家は帯びていて、そうした専門職の掟とおなじほど神聖な掟にたいする義務を負っていることを読者は作家に求める。読者を裏切ったり読者の信頼を乱用することはない、と作家がおごそかに誓約済みだと考える。
> (『批評と小説』より)

読者にたいする作家の姿勢はどうあるべきかについて、当時の「革新批評家」の考えは『グランディシム一族』を考えるときにも示唆に富む。読者の質が向上しているので娯楽じみたものを書くだけでは読者からそっぽを向かれる、というのである。読者は真剣さを作家に求めているから、作家は読者を裏切ってはならない、読者の「信頼」乱用は慎めというのである。

もっとも質が向上した読者は娯楽だけでは満足しない、というハウエルズの言葉はじっさいは割り引く必要がある。というのも1899年におこなった講演のなかでハウエルズは、ほとんどの読者は作家から「娯楽」しか求めていない、と本音らしきものを漏らしているから。『批評と小説』は1886年から91年にかけて『ハーパーズ・マンスリ』の編集後記を評論集として刊行したものである。多大の影響力を読者、それも特に中産階級の女性に対して持つこの雑誌の紙面で温厚篤実なハウエルズのような編集者が自らの読者評について自制心を働かすのは当然といえば当然だろう。ひょっとすれば自らを偽ったのではないかとも思うが、ちとうがちすぎか。

それはさておき、読者にたいしては「外科医か牧師」のように自らの立場をわきまえ「神聖な掟」を尊重せよ、というハウエルズの見解を見方を変えて考えよう。すると作家たるものは軽率な自己主張には慎重であれということでもあろう。これは状況次第では作家の自己抑制にもつながりかねない。つまり自らの信ずるところを読者に直接アピールするよりは読者の感性や道徳観を逆撫でしないことに意を払

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

う創作姿勢にもなりかねない。

『グランディシム一族』は時代背景が19世紀初頭に置かれていることもあって、4組のカップルの結末はひっきょう時代の枠組みを越えた展開にはなっていない。将来の安定と繁栄を読者に約束するかのような二つの家庭の誕生、自らの肺の病が重症なのを知っていてフラウエンフェルドにクロチルドを譲るチャーリー・キーンの公平無私な態度、いずれ劣らぬ気品と重々しさを備えたオノレ兄弟など、中産階級の理想としての「安らぎある家庭」や「紳士たること」を重んじた保守的なビクトリア朝時代の文化風土のなかに巧みに収まりきるように構成されている。だからこそ人種問題を扱いながらも、若い女性中心の読者にも『グランディシム一族』は容易に受け入れられた。ハウエルズがケイブルをかったのも、つまるところ、この文壇の大御所がいだいていた好ましい作家観や小説観に『グランディシム一族』が合致したからである。

ただし、この作品の「保守的側面」だけを強調するのは作品評価のバランスを欠くというもの。そこで次に作品の「先進性」について考えてみたい。

『グランディシム一族』の先進性

19世紀後半の南部がかかえていた最大問題である「人種問題」について、『グランディシム一族』は20世紀南部小説に近い「先進性」を示す。ここでいう20世紀南部小説とは、たとえばフォークナーの『アブサロム、アブサロム！』や『行け、モーゼ』、あるいはロバート・ペン・ワレンの『すべて王が臣』といった作品をさす。また「先進性」とは黒人やミューラトウが耐えねばならなかった苦しみにたいする、白人側の償いという20世紀南部小説の中核テーマの一つを先取りしているという意味である。

具体的エピソードをあげて考えよう。パルミールが白人オノレから受け取った金がある。噂では彼はパルミールに20年間で合計百万ドルばかりを送金した、という。この金は弟が兄にたいして二重の償いをおこなったという構図になっている。ひとつは、クレオール社会で兄オノレと彼の愛するパルミールが直接間接に味わっ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

た屈辱と怒りにたいし、その代償として弟オノレが兄の不動産収益を彼女に渡しつづけた、ということである。もう一つは破産しかけた弟の事業に出資して一族の危機を救おうとしてくれた兄への礼である。二つともクレオール社会で生きていくうえで兄が混血であるがゆえに担うしかなかった重荷にたいする弟の贖罪行為となっている。

さっき私はパルミールと混血オノレの恋が実らなかったところに作品の保守性があるといった。だが、考えてみれば、弟が兄オノレのためにパルミールに償いをするという構図は、1942年に上梓された『行け、モーゼ』の主人公アイク・マッキャスリンを彷彿とさせるという意味で、まことに先進的でもある。祖父が女奴隷と彼女とのあいだに生まれた実の娘と交わったのを発見して恥辱と呵責にさいなまれたアイクは、まず遺産相続を放棄する。次に祖父が黒人の息子や子孫に残した遺産を実際に彼らに渡そうとテネシー州まで出かけていく。そうしたアイクの姿はフランスはボルドーに住むド・グラピオンの血を受け継ぐかつての奴隷にせっせと送金し続けた白人オノレと酷似している。ともに南部社会の罪とその贖罪を正面から受け止めようとする一人の人間の誠実な姿である。だとするならば、ケイブルの主人公はフォークナーの主人公がもっていた精神構造を60年先取りしたということになる。

ジムクロー体制の確立

1880年に上梓された『グランディシム一族』に白人側の贖罪という考えが盛り込まれていることは興味深い。当時の南部全体の動きに逆行し、むしろジムクロー体制の弱体化と崩壊という現代南部の精神構造に近いものを感じさせるから。『グランディシム一族』上梓ののち、1890年代から20世紀初頭にかけて南部はジムクロー体制を確立する。C・V・ウッドワードのいう「抑圧と硬直した画一の時代」が到来する。南北戦争終結から再建期にかけて流動的で若干の柔軟性は備えていた両人種の曖昧な関係が断ち切られたのである。人種分離が法によって決められた時代、差別の成文化の時代である。黒人の投票権剥奪や公共施設、交通機関での分離が慣習や暗黙の了解ではなくて、立法化という動かし難い明確な形で実現していった時

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

代である。

南部小説を読む場合われわれはややもすると南北戦争終結後すぐに、1960年代まで百年のあいだ南部はジムクロー体制に呪縛されていたかのように錯覚している場合がありはしまいか。じっさいには再建期中は限定的とはいえ、両人種のあいだにかなりの交流があったとウッドワードは指摘している。(『アメリカ人種差別の歴史』、第二章「忘れられた別の選択の可能性」参照) ジムクロー期ほど両人種の関係が悪くなかった例は多くあげられているが、あとに論じるケイブルとグレイディとのかかわりで興味深い例を一つだけ紹介したい――鉄道での「人種分離」である。

戦争終結後、南部諸州はかつての奴隷制を実質的に存続するため悪名高い一連の「黒人法」(ブラックコード) を制定した。そして三つの州が鉄道での「人種分離」を法的に定めたという――フロリダ、テキサス、最後にミシシッピである。フロリダでは「白人が黒人専用の客車に乗ること及び黒人が白人用の客車に乗ることを禁止したが、鉄道会社に両人種のために別々の車両を整備することは要請しなかった。」テキサスでは1866年に「解放黒人用に一両の特別車両の連結」を法で命じた。最後にミシシッピでは「解放黒人、その他の黒人、混血人 (ミューラトウ) に対する、白人専用一等車への乗車禁止に法的効力を与えた」。もっとも二等車では人種混乗についてはなにも触れず、黒人専用車も必要ではなかった、ともいう。「かなり後に完全なジム・クロ (ママ) 法が実施されるまでは二等車における人種分離は要求されなかったし、一等車における差別も普遍的ではなかった」(『アメリカ人種差別の歴史』、第一章)。

要するに鉄道での分離についても終戦後しばらくは紆余曲折があって、ケイブルの時代ほど人種分離は厳格ではなかった。だが1880年頃には最初のジムクロー法があらわれ、やがて20年ほどの歳月をかけて (ヴァージニアのような) 大西洋岸の旧南部諸州にも定着していくことになる。1880年というのは人種間の平等という20世紀の歴史の流れに、南部がいよいよ逆行しはじめた時期であることを今いちど確認したい。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

「革命家」ブラ・クペ

話を『グランディシム一族』の先進性に戻そう。白人の償いにつづいて、この小説の先進性を挙げるとすれば、ブラ・クペに描き込まれた白人支配に反逆する「革命家」としてのイメージがあげられる。これについては政治小説として『グランディシム一族』を読みとろうとされた里内克巳氏が詳論されているので、氏の論旨を簡単に紹介したい。(『グランディシム一族――クレオールたちのアメリカ南部』所収、解説「その二」参照)

ブラ・クペを考えるとき、まず念頭に置くべきは奴隷制にたいする「反抗する闘士」としての側面であると里内氏は考える。『グランディシム一族』執筆にさいして、作家はルイジアナに流布していた一人の黒人奴隷をめぐる伝承をもとに独自のブラ・クペを創作していった。そのさいケイブルは西インド諸島フランス領植民地サン・ドミンゴで黒人奴隷反乱を指導し、のちに獄死したトゥーサン・ルヴェルチュールをブラ・クペの姿に織り込む。1789年に勃発したフランス革命に触発されたサン・ドミンゴの奴隷たちは、数年後に武装蜂起して1804年史上初の黒人共和国ハイチを建国する。白人支配にたいする黒人奴隷の反逆は合衆国、とりわけルイジアナなど深南部のプランター階級を震撼させたにちがいなく、旧来の支配体制を維持しようとする保守派と、白人オノレのようにフランスで教育を受けてリベラルな考えをアメリカに持ち帰ったクレオールたちのあいだには摩擦や不協和音が生まれる…・

ケイブルも確かに作品に込めたであろう、フランス革命と黒人奴隷の反乱をめぐる「裏の歴史」について資料を丹念に渉猟して読み解かれた里内氏の指摘は正鵠を射たものだと私は考えはする。たしかにホセ・マルチネスの館から逃亡し、独立を果たして自由を謳歌する場面など、本文中にはブラ・クペと「黒人革命」との連関を感じさせる場面や状況が散見される。そのなかには、ジムクロー以降ながく暗い20世紀前半のトンネルを抜けて、やがて公民権運動の明かりを求めて戦い抜いた黒人たちの不屈の精神と誇りを彷彿させる場面もある。たとえば、ブラ・クペにキリスト教（カトリック）に基づいた臨終を迎えさせようとする神父をまえに、「アフリカだ」の一言を残してブラ・クペが旅立つ姿はまことに現代的である。60年代か

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ら70年代にかけてアメリカ中を吹き荒れたかつての「ブラックパワー」を思い出させる。だから私はブラ・クペの姿に込められた新しい現代的黒人像を否定するものではない。

だが、こうした進歩性と並んでブラ・クペをめぐる物語の展開にも、まず表に出てくるのは時代の保守性であることは指摘しておきたい。私の基本的な考えを言えば『グランディシム一族』は時代を先取りする進歩性と時代の文化に従順な保守性とのバランスのうえに成立した作品であり、全体としては保守性のゆえに発表当時は評判を博したのだと考えるのである。

白人支配に抵抗した「革命家」としてのブラ・クペの先進性を作家は前面には押し出さない。ブラ・クペを正面から「革命家」としては描かない。こうした作家の曖昧さやおそらくは意識的ではないかと思われる回避的姿勢にこそ、実は私は着目したい。そこでブラ・クペをめぐる「視点」について考えてみよう。

ブラ・クペと三人の語り手

ブラ・クペは三人の語り手によって同じ日に語られたということになっている。(第28章) だがそう言っておきながら、「誰か一人だけの言葉を正確にたどること」はしないと作家は明言して全知の言葉でブラ・クペの反逆と死を語ってしまう。フォークナーのサトペンとは違って、ブラ・クペは多重的視点からは語られずじまい。『アブサロム、アブサロム！』や『響きと怒り』のように複数の視点を用いることで達成される作品の奥行きと語りの醍醐味を知る読者にすれば、肩すかしとしか言いようがない。白人たちを震撼させた伝説上の人物は作者の言葉のなかに納められて明確化される。だがその代償として陰影を失って平板化される。読者はスケールの小さな人物に矮小化されたブラ・クペを見るだけなのである。

三人の語り手が語るブラ・クペ像がもし作品に提示されていたとすると、これは興味深いものになっただろう。というのも語り手として設定されたオノレ兄弟、それにラウルの三人は、それぞれに異なる文化背景を持ち、彼らのつくりあげるブラ・クペ像は三人三様の異なる光を放ったはずだから。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

混血オノレと「解放黒人」

最初に混血オノレ。ヌマ・グランディシムが混血女性とのあいだにもうけた兄オノレは、有力者だった父の威光もあって「自由黒人」という立場にある。奴隷制からはみ出した存在である。プランテーションで朝から晩まであくせくと働く「フィールド・ハンド」とは異なる境遇。遺産のおかげで借家を持ち家賃で暮らしてゆけるほど例外的に豊かである。それでは彼のような境遇にいた自由黒人は、現実の再建期南部でも「市民」として白人社会にほんとうに認知されていたのかというと、実体はまったく違っていた。

ウッドワードによると、戦前南部にはチャールストンやニューオーリンズといった都市社会を中心に数十万人の「自由黒人」が暮らしていたという。だが彼らは自由というより「半自由」黒人といったほうがふさわしかった。白人よりは一段と劣った地位しか社会的には与えられていなかった。「奴隷州がこれらの人たちに与えた待遇はあとの人種分離の制度をそっくり予見させるものであった」とウッドワードは言う。（ウッドワード、第一章）自由黒人とは名ばかりで「法廷における平等、集会の自由、移動の自由」といった市民としての基本的権利をも奪われていたのである。こうして混血オノレはジムクロー時代の解放奴隷と重なりあうことになる。『グランディシム一族』が19世紀初頭のルイジアナを描きながらも、じっさいには再建期以降の南部（それも深南部）社会を強く意識しながら描いているのがわかるひとつの具体例である。

「私は奴隷じゃない」

「確かですか？」借家人が尋ねた。

家主が彼を見つめた。

「私にはどうも」フラウエンフェルドが言った。「あなたや、あなたの階層――つまり混血だが自由な人たち――はみんなのなかでもっとも悲しい奴隷に思えるんです。あなたの階層の男たちは僅かばかりの資産と引き換えに、それに女性は色恋でちやほやされるのと引き換えに、不満という徳を奪われてしまった。くだらないイカサマの自由という餌と引き換えに、専制的な侮辱には辛抱すると同意したのです。その侮辱のおかげで厚い石板に押さえつけられた草みたいに、あなた方はぺしゃんこのゴミなのです。私ならそんな自由で満足するよりは沼に落ちのびます。形のうえでは自由でも精神は奴隷という、あなた達の階層が世間をまえにした現状では、あなたは――思わず思い浮かんだ言葉だけれど――慈善家に対する警告ですよ！」（『グランディシム一族』、第30章）

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

混血オノレにたいする相も変わらぬフラウエンフェルドの（無礼で）忌憚ないこの言葉は、あとでわれわれが目にするオノレのアグリコラ殺害を示唆して興味深い。血の宿命を堪え忍んだこの男は、与えられた「イカサマの自由」を捨ててブラ・クペと同じように反逆への道を歩んだ。そのような行動に出た混血オノレが語ったブラ・クペ像がわかっていれば、自由を奪われた囚われの王子としての側面が作家自身の言葉によるよりもより鮮明になっただろう。むろん同時にジムクロー時代の「解放黒人」の立場がブラ・クペ像に投影されただろう。だが、混血オノレはブラ・クペについてなにひとつ語らなかった。惜しいことである。

ラウル・イナラリティと平均的ブラ・クペ像

ブラ・クペを語ったことになっている二人目はラウル・イナラリティ。進歩的なフラウエンフェルドに感化されはするが、黒人や混血にたいする態度についていえばラウル・イナラリティは基本的に変わらない。人種をめぐるクレオール社会のあり方に疑問も葛藤ももたない。アグリコラに負けず劣らずの人種主義者である。ただしこれを逆にいうと、ラウルが語るブラ・クペ像はクレオール社会が彼について抱く平均像と考えることもできる。その意味では実は便利な語り手でもある。では、そうした立場にあるラウルはどのようにブラ・クペのことを語ったのか。さきの混血オノレのブラ・クペ像について、本文中にはまったく手がかりがなかった。だがラウルのブラ・クペ像なら手がかりが少しはある――ブラ・クペが歌っていたとされる歌である。

グランディシム一族の乙女たち相手にブラ・クペについて語りだしたとき（第27章）、ラウルはブラ・クペが歌っていた恋の歌を紹介する。同じような歌が何回か繰り返し紹介され、ご丁寧に楽譜までついている。読者へのサービスを作家が強く意識しているのがわかる。物語の現在を生きる乙女たちにすれば、ブラ・クペをめぐる8年前の顛末はなによりエキゾチックな雰囲気に包まれた、いまは亡き「高貴なる野蛮人」をめぐる冒険物語としての色彩が強い――ロマンチックで「哀れな話」なのである。したがってフラウエンフェルドとはちがい、女性たちはブラ・クペや

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

彼の死を自分や自分たちが暮らしている社会と深く結びつけて考えることはない。だからこそラウルの話を聞き終わった彼女たちは、女性と赤ん坊への思いやりと礼節をわきまえた騎士のごとき人物の腱を切るのは良くないと考えはするが、「他にこうすれば良かったのにと言い出すわけにはいかなかった。ブラ・クペは彼の運命にふさわしくはあった」（『グランディシム一族』、第30章）という結論を抱いて眠りにつく。すべてはそこで終わる――現状肯定派のブラ・クペ像には同時代の文化の深淵をえぐり出す想像力は乏しい。

議論しない白人オノレ

白人オノレのブラ・クペ像はどうか。フランス革命の激動期にともにパリで教育を受けたオノレ兄弟は「自由、平等、博愛」という革命の精神を学んだ。ニューオーリンズに戻ったのちも弟は革命の精神にならって行動する。クレオール社会で指導的立場にあるにもかかわらず「人間には誰かれの区別なく自由がある」と触れてまわる。旧来の考え方に浸った一族の人たちを驚愕させ悶着を起こす。ブラ・クペの墓をまえにしたオノレが、「あの黒んぼのおかげで私の信念たるや、流れ全体が変わってしまいましたから」とつぶやくのも読者は確かに耳にする。（第7章）捕らえられたブラ・クペのために奮闘し「ブラ・クペには害を加えない」という約束までホセ・マルチネスから取り付けたらしいことも確かにわかる。（第29章）

こうして白人オノレはブラ・クペをめぐって時代を先取りする言動を見せたはずである。だが作家自身はブラ・クペをめぐって新旧の思想が衝突したはずの場面は一切省略した――それこそ小説の読みどころだったはずなのに。オノレと保守的な一族の人びととの直接のやりとりはどこにも見られない。ブラ・クペの反逆と死はすべて8年まえの過去のこととして全知の語り手によってわずか数章に圧縮されているだけである。ブラ・クペの反逆と、その反逆がクレオールに与えた社会的衝撃や波紋は物語には断片としてしか描き込まれない。奴隷制を基盤とするクレオール社会がブラ・クペをどのように受け止め、どう対応しようとしたのか作家は実はほとんど語らない。ただあるのは、ブラ・クペがかけたブードゥーの呪いがいかに恐

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ろしく、人びとがいかに彼のたたりを恐れたかという、おどろおどろしい話だけである。

作品のなかでブラ・クペには二重の役割が負わされている。つまり里内氏の指摘された時代を先取りする「黒人革命家」としての姿がひとつ。これは現代の読者にアピールしやすい。次に、ニューオーリンズの「ローカル色」を当時の一般読者、特に南部以外の読者に印象づけるためのツールとしての存在である。異国情緒趣味を満足させるための道具である。情報や映像に乏しい120年前の読者にすれば、楽譜付きのブラ・クペの恋歌はそれだけで遠い南国ニューオーリンズへの好奇心をかきたてたのではないか。あるいは、噂に聞くあやしげなブードゥーの「呪い」がプランターをさんざん悩ませたのを読めば、異文化が支配するニューオーリンズへの憧れも満たせたかもしれない。要するに、ケイブルは当時の一般読者を念頭に置いて、話があまりに露骨な社会性・政治性を帯びないように配慮していたことになる。そしてここにも冒頭触れた編集者の作家への「忠告」（注文）が働いていると考えられる。

編集者とブラ・クペ像

ターナの伝記は『グランディシム一族』を掲載した『スクリブナーズ・マンスリ』の編集者たちが、この作品にどのように反応し、いかなる注文を作家にだしたか、ある程度詳細に解説する。そのなかで興味深いことの一つは、編集者たちがケイブルには「小説を離れて党派的主張にむかう」（“leave the novel and go pamphleteering”）傾向があるのを懸念し、弾劾口調に流れるのを戒めたことだろう。小説のなかで自分の信奉する政治談義を飽きることなく、とうとうと喋りまくるフラウエンフェルドを見ていると、編集者のこうした懸念も納得できよう。ルイジアナ社会の「欠陥」をならべたてる彼をまえにするとオーロラやクロチルドならずともたじたじとなるではないか。

黒人問題について作家が弾劾口調に陥るのを懸念した編集者 ロバート・U・ジョンソン (Johnson) は、もしこの問題を扱うのなら「劇的」（“dramatically”）に扱

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

うように作家に忠告した。黒人問題をめぐって、ケイブルが実際にどの程度編集者のこうした注文に応じたかについて結論を出すのは容易ではない。完成稿にいたる推敲過程調査が必要だし、それだけの準備が今はないから。そこでどうしても一次資料をふんだんに参照できたターナの記述を受け売りするみたいで恐縮だが、ひとつだけ指摘しておきたい。それは完成稿では「奴隷制と自由黒人の地位」（“slavery and the position of the free quadroons.”）をめぐる登場人物の議論が、初期の原稿よりもずっと簡略化されたというターナの指摘である。またこの問題について作家が割り込んでいって直接読者に語りかけた部分がほとんど脱落している、というターナの結論である。（ターナ、第十章）

もともとブラ・クペは「ビビ」という短編で主人公として登場した。残念なことにこの作品は現存しない。だから「ビビ」におけるブラ・クペの全体像は確かめようもない。ただし、この短編のアフリカの王子は、悪夢となってケイブルの友人の睡眠中にあらわれるほどの迫力だったという。（ターナ、第5章）『スクリブナー』も『アトランチック』を掲載を断った。あまりに「悲惨」だったから。

「ビビ」で世に紹介されることのなかったブラ・クペが次に姿を見せたのが5年後の『グランディシム一族』である。だとするならば、ブラ・クペにたいするかつての冷ややかな反応を経験済みの作家が改めて彼を『グランディシム一族』で登場させたとき、社会・政治問題ではなくて芸術としての小説の枠組みにこの人物を納めきろうとしたことは間違いなかろう。女性や子供に優しい高貴なる野蛮人としてのブラ・クペ像には、たぶんに一般読者の肯定的反応を狙ったケイブルのしたたかな計算が働いていると考えても牽強付会とはいえまい。

それはさておき「視点」に戻らねばならない。この技法の取り扱い方と利用効果の点から見ればケイブルは要するに古めかしい。異なる立場から多様な光を当てて一人の人物像をつくりだし、その人物の複雑さと多重性を強調する――そして語り手自身の万華鏡のような世界をも読者に垣間見させるという20世紀小説の革新的技法はケイブルにはない。三人の語り手が語ったはずのブラ・クペ像は幻のままに消え去ってしまった。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ジムクロー時代に突入しつつあった時代に、白人社会が黒人にたいして負う罪や、その贖罪を扱うという設定には『グランディシム一族』の先進性がある。時代の先取りである。だが、そのテーマの新しさがかすんでしまうほど、古めかしい恋のさやあてが前面に押しだされる。また視点の効果を最大限利用できる作品だったにもかかわらず、結局は全知の語りでブラ・クペを単純化してしまう。このようにテーマ処理の方法や技法から見ると『グランディシム一族』はやはり保守的といわざるをえない。19 世紀の小説なのである。

＊　　＊　　＊

グレイディとの論争

『グランディシム一族』上梓 5 年後の 1885 年秋、40 年間住み慣れたニューオーリンズを去ったケイブルはマサチューセッツ州ノーサンプトンに移り住んだ。こののち故郷を再訪はしてもふたたび定住することはなかった。ケイブルを見つめるニューオーリンズの人びとの眼差しが敬意と賞賛から敵意と侮蔑に変わってまったから。直接の原因は、この年『センチュリ』一月号に掲載された彼の論文「解放民に公平を」（“The Freedman’s Case in Equity”）に盛り込まれた黒人地位向上を求めるケイブルの主張であった。ケイブルの予想を遙かに超えて山のような反論が『センチュリ』編集部に寄せられた、という。（ターナ、第 15 章）個人的中傷もあった。北部や西部では幅広い支持があったのに、南部ではごうごうたる批判の嵐だった。南部に講演旅行にゆくと人びとのあいだに、ケイブルは北部の聴衆相手に「南部の罪」について熱弁をふるって金を稼いでいるという話が語られていた。（ケイブル、「私の政治的立場」による）

ケイブルへの南部全体の反発を代表して、『センチュリ』4 月号には新南部建設唱道のチャンピオン、ヘンリ・H・グレイディの論文「まったき黒人と白人で」（“In Plain Black and White”）が掲載される。九月になると今度はケイブルが「沈黙する南部」（“The Silent South”）を同誌に発表して反論を加えた。こうしてケイブ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ルと故郷の人びとの亀裂は決定的となる。ケイブルは南部を愛することにかけては誰にも引けを取らないと、なんどか語っている。そのケイブルに故郷との決別を決意させる直接の引き金となったグレイディとの論争と三つの論文の中心問題を整理しておく。

グレイディとの論争におけるケイブルの立場と目的は一貫している。奴隷制が否定され、かつての奴隷が解放民として形のうえでは市民権を獲得した再建期後にあっても、戦前の体制を事実上維持しようとする多数の平均的白人を批判し猛省を促すことであった。同時に、戦前の旧体制が時代遅れであることを認識しているのに、改革への声をあげようとしない少数の良識派南部白人に訴えることでもあった。黒人をめぐる理不尽な社会状況を打破しようとしたのである。

ケイブルは主に司法制度、教育制度、特に鉄道での「分離」を例にとって黒人の置かれた不利な立場を論じた。まず裁判官や陪審員は白人が圧倒的多数を占めており（司法）、平均的南部白人は黒人が高い教育を受けるのを快しとしないこと、などが語られる。（教育）そのあとケイブル自身が実際に経験した鉄道での人種分離の実体が紹介される。これはあとのジムクロー体制をかんがえるとき象徴的である。またケイブル自身が目撃した実話であるだけに興味深い。

1883年9月のこと。作家がアラバマを汽車で夜に旅していると、さっぱりした身なりの黒人母子が乗りあわせてきた。次の駅で今度は鎖につながれた9人の黒人囚人が乗車する。母子と同じコンパートメントに乗り込んだ囚人のおかげで客車は臭いがひどくなり、作家は別の客車に移る。だが、くだんの親子は囚人がひしめくコンパートメントを出られない。空席のめだつ作家の客車には移れなかった。車掌が許さなかった。もちろん黒人だったから――このエピソードについてケイブルは、もし幼い女の子が白人でありさえすれば二人は移られただろうし誰も反対はしなかっただろうに、と考える。実の親子だったのが悪かったのである。

この例からもわかるように、黒人を対等の「市民」として受け入れる準備が白人側にはまだなかった。子供に付き添うのが「母」ではなくて「乳母」なら、つまり白人に仕える一段と身分の低い黒人なら白人の生活圏に入ってもよかった。敗戦が

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

もたらした奴隷制崩壊と黒人への投票権付与はなんとか受け入れても、多くの白人の胸のなかでは、奴隷制とともに消滅すべきだった黒人への優越意識は生き残っている。黒人は人種として劣っているという考えが土台にある。だから黒人の権利は白人と比べて制約をうけ、さらには剥奪されても当然だという意識が生まれる。ケイブルを非難することになる平均的南部白人の意識はそのようなものだった。

黒人の地位と混血の恐怖

黒人に白人市民と対等の権利を与えると両人種が接触する機会が増え、ひっきょう「社会的無秩序」がおきると平均的保守派南部白人は恐れている、とケイブルはいう。じっさいグレイディもケイブルへの反論のなかで「南部はけっしてケイブル氏が示唆する両人種の社会的合流を受け入れない」と明言している。保守派が恐れる「社会的無秩序」とは両人種の関係が深まり、さらに進んで白人と黒人との「血の交わり」、つまり "miscegenation" が広まってゆくことを指している。保守派白人が "miscegenation" を嫌悪し、強迫観念に近いまでのおぞましさを感じていたのは、「まったき黒人と白人で」のなかでグレイディが執拗に "miscegenation" の恐怖を繰り返し、あおり立てていることからもうかがえる。

"miscegenation" はのちに南部白人男性作家の大きな関心事となってゆく。トウェインの『うすのろウィルソン』、フォークナーの『八月の光』や『アブサロム、アブサロム！』など、日本のアメリカ文学研究者にはお馴染みの作品が思い浮かぶ。この点でも混血のオノレを 1880 年の小説に登場させたケイブルは時代を先取りしていたことになる。それでは小説ではなく、政治論文「沈黙する南部」でケイブル自身は "miscegenation" をどのようにとらえているだろう。

結論からいえばケイブルは両人種の血の交わり、"miscegenation" を是認しているわけではない。というよりも "miscegenation" は作家の関心外なので語っていないというのが実状に近い。作家は白人と黒人のあいだに "miscegenation" がおこるかどうかは社会体制や制度を離れた個人的レベルの問題、人種には関係のない個人的好悪や嗜好、純然たる私的選択の問題であるという。このように肌の色にとらわ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

れないケイブルの立場からすれば、白人市民と対等の権利を黒人に与えると黒人が自由に白人を伴侶(愛人)として選びとり危険このうえない、とする保守派の議論は的はずれとしか映らない。著しく論理を飛躍させて作家の論文「解放民に公平を」の趣旨を誤解している、というのがケイブルの説明である。

「市民的関係」と「社会的関係」

作家によれば、保守派の筆頭グレイディは「市民的関係」(“civil relations”)と「社会的関係」(“social relations”)を取り違えているという。両者の違いについて「沈黙する南部」のなかで作家はいくつも具体例を挙げて説明する。グレイディとの論争のなかで、ケイブルにとってそれだけ核心に迫る問題だったのがわかる。さて、ここで作家の言う「市民的関係」とはアメリカ市民には肌の色に関係なく誰にでも与えられているはずの「非個人的権利が決める生活のあらゆる関係」を指す。アメリカ社会のなかでアメリカ人たる一人の人間をどのように位置づけるかをめぐる、主として社会全体と人間との公的な、したがって無味乾燥な関係である。いっぽう「社会的関係」とは「個人的選択で決まるすべて」である。つまり、家庭や結婚といったように主に個人と個人とのあいだで自由自在に変化するデリケートで、なまなましさを秘めた関係である——アメリカ社会における社会と個、個と個をめぐるこれら二種類の「関係」は本来的に性格が異なる。なぜなら、この二種類の関係は個人の「権利」と「選択」という相異なるジャンルから生まれてくるから。

ケイブルの反論の主点は大筋次のようになろう。黒人にアメリカ市民としての権利を与えることで、黒人は南部社会のなかで「市民的関係」(“civil relations”)を築くことになろう——だが、だからといって黒人が白人と家庭を持って両人種の混血がただちに進むことにはならない、またそこまで突き詰めた両人種の相互関係のあり方を自分は主張してはおらず、促進しているのでもない、というのである。黒人と白人の血が交わるようになるかどうかは、繰り返せば個人同士の選択の問題で、社会制度のあり方をめぐる議論とはなじまない。南部社会における黒人の公的位置づけと、人種を離れた私的関係とをグレイディは誤解、もしくは歪曲していること

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

になるとケイブルは言う。

“miscegenation” はケイブル攻撃にグレイディが用いたもっとも有効な武器だった。作家への人びとの反感をいやがうえにも高めただろう。自分たちと対等の権利を黒人に認めたとき、白人女性が彼らの子供を産んで混血児が増えてゆくという光景は南部社会を牛耳っていた白人男性には耐え難いことだっただろうから。クリスマスのなきがらを傷つけたパーシ・グリムが思い出される。だが「まったき黒人と白人で」でグレイディが繰り広げるケイブルへの反論のなかには、他にも人種をめぐる当時の南部白人の考え方がうかがえて興味深い。とくに注目すべきは、「両人種は本能的に交わることを嫌うから、分離しなければ双方のあいだに争いが起こる」という主張だろう。終戦直後に北部の肝煎りで実施された人種統合への努力は、教会でも教育の現場でも水泡に帰した、とグレイディは実例を挙げる。両人種が席を並べて社会生活を営もうとしても成果をあげることはできなかった、というのである。だいいち黒人自身が白人と同じ市民としての権利を持つことを望んでいない、とまでグレイディはいう。グレイディの論理は両人種本質的相違論なのである。そこから引き出される当然の結論は「分離すれども平等」（“separate but equal”）というジムクロー体制への傾斜である。奴隷制時代のような慣例としての分離ではなくて合法的分離体制支持である。

ジムクロー体制賛美と北部への反発

ジムクロー体制が進みつつあった南部の現状をグレイディは積極的に肯定する。その将来についても楽観的である。自信たっぷりである。「便宜は平等だが分離」というジムクロー体制の大原則は立派に機能しているという確信が彼にはある。司法制度、学校教育の現場、教会、社会組織、鉄道などケイブルがふれた南部の社会基盤のいずれをとっても、事態は良好であるとグレイディはいう。確信が彼のエッセイに満ちている。ジムクロー体制が確立されつつあったこの時期でも、黒人は社会的に不利な立場に置かれているわけではない、とグレイディ自身が盲信していたからだろう。そうでなければ人種をめぐる「分離すれども平等」という南部の基本姿

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

勢をグレイディが「進歩」ととらえることは難しかっただろう――「人種間関係を正当に調整しようとして南部がおこなっている進歩については、まちがいようがない」とまで明言している。十年前、つまり再建期末期には両人種のあいだには一触即発の危険があった。だが今や「疑念と不信の時期のあとに自信と善意の時期がやってきた」と意気軒昂でさえある。あげくのはては「地上にある社会の二つの階層のあいだに、現在の南部で白人と黒人のあいだにある以上の思いやり、緊密な好意、摩擦のなさは存在しない」とまでのたまう。現在から見ると誤解としか言いようがないだろうが…

ジムクロー体制の「利点」を積極的に力説するグレイディの真剣さをなん人も疑うわけにはゆかない。こうした確信は言うまでもなく、人種主義の考え方から生まれた。黒人は「親切な依存的人種」でしかなく、社会を「統治」するのに必要な「知性、品性、徳性」（“intelligence, character, property”）を備えているのは黒人ではなくて白人だというのである。

白人支配と黒人従属という考え方を形づくった主たる要因は、ながらく続いた奴隷制やそれにさかのぼって白人入植者が南部の支配者だった歴史的事実である。そして、そうした歴史的背景を背負っているからであろう、南部のことは南部が――したがって実権を握っている南部白人が――決めるのだという強い決意がグレイディのエッセイにはうかがえる。なにも分かっていない連邦政府や、よそ者たる北部政治家が南部のことに口出しするのは許さないという呪詛にも似た排他性である。奴隷解放と市民権付与は受け入れるが、それ以上部外者の干渉には一歩も譲らないという姿勢である。だから見方を変えると人種問題を語りながら同時にグレイディは、北部の圧倒的武力と経済力のまえに敗れ去った南部人の傷ついたプライドや敗戦の悔しさ、また踏みにじられた南部の「権利」擁護について語っていることになる。人種問題をめぐって南部がのちにあれほどかたくなだったのは、この問題が南部の支払った犠牲と敗戦の心理的傷跡の裏返しだったからだろう。人種主義は敗れ去った南部の最後の砦として生き続けねばならなかった。だからこそ「分離すれども平等」という表向きの看板とは裏腹に、実体は「分離して不平等」というジムクロー

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

体制が半世紀以上続いたのではないのか。南部の人種問題が、多くの南部白人の血が流された北部との歴史的軋轢とも深く関わっている以上、短時間のうちに解決できるはずはなかったのである。

政治論文と小説『グランディシム一族』

駆け足でケイブルとグレイディの論争を振り返った。共和国を標榜するアメリカの構成員である以上、対等の市民として黒人にも白人同様の公的諸権利を実質的に与えることを考える時期が来た、と作家は主張した。これにたいして、本質的に異なる両人種は分離しておくのが互いの利益にかなうのであり黒人自身も分離を望んでいる、優れた人種が劣った人種を支配するのは当然だ、と新南部の指導者は反論した。どちらの主張に歴史の審判が微笑んだかは今日の読者なら誰もが知っている。時代錯誤的人種主義は20世紀の公民権運動の考え方を先取りした「裏切り者の南部人」の勇気ある言葉のまえで、いまは色あせて見える。もっともアメリカが、「すべての人間は神によって平等に造られ、一定の譲り渡すことのできない権利をあたえられて」いるという国是を掲げる社会である以上、ケイブルもほんとうは「古い」のかもしれないが……

さて、政治論文に見られる人種問題をめぐるケイブルの先進性は実は『グランディシム一族』でもすでに読みとられたことである。政治論文のなかで表明された作家の立場は主にフラウエンフェルドや白人オノレによって代弁されていた。もちろんキーン相手に分離政策をちくりちくりと批判するクレメンスのような脇役も忘れるわけにはゆかない。けれどもこの二人こそ南部批判の主役である。特にフラウエンフェルドの意見は急進的で鋭い。彼が批判の矛先をむけた奴隷制や封建的階級制の害悪といったトピックは、政治論文のなかで今度は作家が直截に自らの言葉で語っていることである。このようにヤンキーの若者と作家は政治的意見については、それほど大きく隔たっているわけではない。だが小説が世に出た当時、作品に腹を立てた読者は多くはなかった。先に紹介したようにクレオールを別とすると南部の多くの読者は『グランディシム一族』に好意的だった。拍手喝采したのである。同じ主

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

張を繰り返したにすぎないのに小説で喝采を浴びたケイブルは、政治論文では手ひどい反発を受けた。理由は簡単である。小説での南部批判の急先鋒フラウエンフェルドはヤンキーで部外者だという設定があったからである。内部告発者ではなくてニューオーリンズにたどり着いた、いわば「流れ者」にすぎず、しかも当時の小説の約束事にしたがって彼はクレオール女性と恋に落ちて結ばれる。新しい時代を迎えたクレオール社会の一員としてフラウエンフェルドは受け入れられた。インサイダーとなった彼に読者が怒りをおぼえるはずもない。

インサイダーとして結末を迎えるということなら、白人オノレも同じである。フラウエンフェルド相手にクレオール社会（ということは南部社会）の欠陥を語りあったこの若き族長も、グランディシム一族の危機を救った救世主として小説舞台を退いた。フランス革命の精神にかぶれた「跳ねあがり」ではなく、ヤンキー政府の元でグランディシム一族がどのように生き延びてゆくかに心砕いた有能な商人としての側面に作家は光をあてた。そこには一族の多くの男たちにとっての、いまいましい反逆者としての色彩はほとんど感じられない。白人オノレがまったきインサイダーとなったことによって、ブラ・クペの運命や奴隷制をめぐる論議は小説のオブラートにくるまれ、本来の苦さを失っていった。

ところが小説のオブラートはジャンルの異なる政治論文では使いようがない。人種問題という毒薬を緩和してくれた恋愛小説や風俗小説としての仮面はかなぐり捨てねばならない。作家は小説家としてではなく、社会評論家として発言するほかない。そして甘いロマンスやエキゾチックなニューオーリンズの風物、ブラ・クペがかけたブードゥーの呪いといった楽しい小説の楯に守られないまま、南部社会の「恥部」について語ったとき、ケイブルはアウトサイダーとなった。南部の裏切り者という烙印を押された彼には、ふるさとを去るしかなかったのである。

南部作家たるものは…

1882年フォークナーゆかりの大学であるミシシッピ州立大学でケイブルは卒業生をまえに講演した。講演も終わりの近い部分でこの南部作家は社会に巣立つ若き

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

南部人、それも文学を志す若人に次のように呼びかけている。

「私たちの社会は一世紀半のあいだ奴隷の人びとを飼い慣らして服従させてきた、だから不完全な変化がおきたそのあとの数年で永続的影響が支配階級から雲散霧消するとは考えられない。そこで一世紀半の長きにわたり、私たちの考え方の多くや気質に忍び込んだに違いない欠点を追究しなければならない。誰がすべきか？ よそ者は論外である。私たち自身が追究するのである。われわれのなかで読者になろうとする人たち、特に作家になろうと志す人たちがしなくて誰がするのか…・。アメリカのどの地域も自律しない所があってはならないのなら、私たちもアメリカ文学に相応にあずかって読みたいし書いてみたい。そうするさい、真実と美をめぐって世界が手にする最新の知識と肩を並べるか、それに先んじて執筆できて初めて私たちは究極の失敗を唯一さけることができる。」　（「私の政治的立場」より）

南部文学がアメリカ文学全体から取り残されて孤児となるのを避けるためには世界の思想的進歩に乗り遅れてはならない。そのためにこそ過去の因習やしがらみを見つめる必要があり、そうすることで南部文学は国民文学の一翼を担うであろう、というのがケイブルの趣旨である。ここには将来の南部ルネッサンスとフォークナーの出現を予見する見事な洞察が含まれている。あらためてケイブルという作家の先進性を感じさせる。

引用した参考書目

Cable, G. W. "My Politics." *The Negro Question: A Selection of Writings on Civil Rights in the South by George W. Cable.* Ed. Arlin Turner. New York: Norton, 1958.

Cable, G. W. "The Silent South." 1885. *The Silent South.* New Jersey: Patterson Smith, 1969.

Grady, H. W. "In Plain Black and White." *The Century Illustrated Monthly Magazine,* XXIX (1885), 909-917.

Howells, W. D. "Novel-Writing and Novel-Reading." *The Norton Anthology of American Literature.* Ed. Nina Baym., et al. 2nd ed. New York: Norton, 1985.

Howells, W. D. "Criticism and Fiction." 1891. *Criticism and Fiction by William Dean Howells & The Responsibilities of the Novelist by Frank Norris.* New York: Hill and Wang, 1967.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

Riley, S.G. "Foreword." *Dictionary of Literary Biogaphy,* vol.79. Detroit: A Bruccoli Clark Layman Book, 1989.

Turner, Arlin. *George Washington Cable: a biography.* 1956. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1966.

NII-Electronic Library Service